

# 武ちゃんと昔話

小川未明

青空文庫



この夏休みに、武ちゃんが、叔父さんの村へいったときのことであります。

ある日、村はずれまで散歩すると、そこに大きな屋敷があつて、お城かなどのように、土塀がめぐらしてありました。そして、雨風にさらされて古くなつた門が、しめきつたままになつて、内には、人が住んでいるとは思われませんでした。

「どうしたんだらうか。」と、武ちゃんは、不思議に思いました。門のすきまからのぞくと、家のほかに土蔵もあつたけれど、ところどころ壁板がはずれて、修繕するでもなく、竹林の下には、枯れ葉がうずたかくなつて、掃くものもないとみえました。

あたりは、しんとして、ただすずめの鳴き声なきこえが、きこえるばかりです。

「この家の人は、どこへいったんだらう？」

武ちやんは、家へ帰ると、さつそくそのことを叔父おじさんにたずねたのであります。

「あの、大きな化け物屋敷ばものやしきみたいな家には、だれも住んでいないのですか。」と、いいました。叔父おじさんは、笑いながら、武ちやんの顔をかおをごらんになつて、

「あんなどころまでいったのか。なるほど、一時は化け物も出るといいうわさがあったよ。いい教訓きょうくんになることだから、あの家の話をいえはなししてあげよう……。」と、叔父おじさんは、武ちやんに、つ

ぎのような話をしてくださいました。

それは、昔のことでありました。

正直な百姓が、いつものように、朝早く、野良へ仕事に

いこうと、くわをかついで家を出たのであります。まだ、土がしめっていて、あまり人の通つたようすもありません。百姓が村はずれまでくると、なにか道の上に落ちています。

「なんだろう？」と、足を止めて、それを拾い上げました。なかなか重いのであります。包みを解いてみて、驚きました。重いのも道理で、袋に小判がたくさん入っていました。

「だが、このお金を落としたらう。気がつかずにいってしまう

とは、よくよく道みちを急いそいでいたとみえる。なんにしても氣きの毒どくなことだ。しかし、落おとし主ぬしは、きつともどつてくるだろう。まだ、そう遠とおくへはいくまいから。」と、正しょう直じきな百しやう姓じやうは、思おもいました。

彼かれは、その包つつみを目めにつくように、道みちのそばの木きの枝えだにかけておきました。そして、自じ分ぶんは根ねのところへ腰こしを下おろして番ばんをしていました。ところが、どうしたのか落おとし主ぬしはもどつてきませんでした。

一日いちにちは過すぎ、また二日ふつかは過すぎました。けれど、街かい道どうを急いそいでくる、それらしい旅たび人びとの姿すがたは見みえなかつたのです。彼かれは、毎まい日にちこうして仕し事ごとを休やすんで待まつことに張はり合あいのないのを感じかんじま

した。

ところが、三日め（みっか）のことでありませう。一人（ひとり）の年老（としと）つた旅僧（たびそう）が、自分の前（まへ）を通（とお）りかかりました。

「おお、このお坊（ぼう）さんにきいてみたら、あるいは手懸（てが）かりがあるかもしれない。」

ふと、こう思（おも）つたので、彼（かれ）は、お坊（ぼう）さんと呼（よ）び止（と）めて、自分（じぶん）のこうして待（ま）っているわけを話（はな）しました。なんとなく、徳（とく）高く見（み）えたお坊（ぼう）さんは、百姓（しやうはなし）の話をだまつてきいていましたが、

「いままで待（ま）つてももどつてこないところをみると、おそらくその落（お）とし主（ぬし）はもどつてこないだらう。そのお金（かね）は、おまえ（おまえ）さんに授（さず）かつたのだ。おまえ（おまえ）さんは、そのお金（かね）で田（た）を開墾（かいこん）して、困（こま）つ

ている人<sup>ひと</sup>たちを救<sup>すく</sup>つてやりなざるがいい。そうするほうが功徳<sup>くどく</sup>に  
なります。」と、いいました。百姓<sup>しやう</sup>は、お坊<sup>ぼう</sup>さんのいわれたこと  
を正<sup>ただ</sup>しいと感<sup>かん</sup>じましたから、お坊<sup>ぼう</sup>さんのいつたとおりにしました。  
百姓<sup>しやう</sup>は、地主<sup>ぢぬし</sup>とはなつても、けつして、高<sup>たか</sup>い小作米<sup>こさくまい</sup>を取<sup>と</sup>るこ  
とはなかつたのです。自分<sup>じぶん</sup>は、いつまでも昔<sup>むかし</sup>の百姓<sup>しやう</sup>で、みんなと  
いつしよになつて働<sup>はたら</sup>いて、みんなと苦楽<sup>くらく</sup>を共にしましたから、村<sup>むら</sup>  
の人<sup>ひと</sup>たちからも、恩人<sup>おんじん</sup>と慕<sup>した</sup>われて、たいへん尊<sup>そん</sup>敬<sup>けい</sup>されたので  
あります。

やがて、つぎの代<sup>だい</sup>となりました。いまの大き<sup>おお</sup>な屋敷<sup>やしき</sup>は、この人<sup>ひと</sup>  
の代<sup>だい</sup>に造<sup>つく</sup>られたものです。けれど、この人<sup>ひと</sup>も、よく親<sup>おや</sup>の遺言<sup>ゆいごん</sup>を  
守<sup>まも</sup>つて、村<sup>むら</sup>のものをかわいがることを忘<sup>わす</sup>れませんでした。そして、

やはり、自分じぶんは、田たや、畑はたけへ出て、みんなといっしょになつて働はたらきました。この人ひとの代だいも、また無事ぶじに過すごすことができたのであります。

三代だいめが後あとを継つぐようになってから、だいぶ考かんえ方かたが変かわりました。正しょう直じきな百姓しやうだつた、祖父そふや、父親ちちおやは、みんなといっ

しよに働はたらくことを喜よろこび、いいことがあればみんなとともに樂たのしみ、悲かなしいことがあれば、ともに苦くるしむというふうであつたのを、ば

かげたことだと思おもうようになりました。

「昔むかしむかしは昔いま、今いまは今いまだ。この大地おおじぬし主ぬしともあろうものが、小作こさく人にんといっしょに働はたらくこともあるまい。」と、いいました。

二代だいめが、屋敷やしきを構かまえ、蔵くらを造つくつたのは、先祖せんぞの跡あとを後世こうせいに

残す考えだつたのです。ところが、三代めになると、そんな考えはなく、ただ、遊んで暮らすことばかり考えていました。働くということをきらつて、ぜいたくをしましたから、いつでも金が入用だつたのです。したがつて、小作人には、やかましく年貢を取り立てるし、それでも足りないので、鉾山や、相場でもうけようとして、かえつて、すつかり財産を失くしてしまい、家も、土地も、人手に渡さなければならなくなりました。

「あの屋敷も、この秋までに、取り壊してしまつて、跡を田と畠にしようかという話だ。いくら先祖が偉くても、後をつぐものに、そのりっぱな精神がなければ、みんなこんなようになってしま

うのだ。」と、叔父<sup>おじ</sup>さんは、おつしやいました。

武<sup>たけ</sup>ちゃん<sup>ちん</sup>は、思<sup>おも</sup>いがけない、い<sup>い</sup>お話<sup>はなし</sup>をきいたと、叔父<sup>おじ</sup>さんに、お礼<sup>れい</sup>をい<sup>い</sup>ったのであります。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「日本の子供」文昭社

1938（昭和13）年12月

※表題は底本では、「武《たけ》ちゃんと言昔話《むかしばなし》」  
となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年9月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 武ちゃんと昔話

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>